

Title	西洋史の先学たち(二)
Sub Title	Pioneers in the study of European history at Keio University (2)
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.47(221)- 63(237)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第一回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西洋史の先学たち (二)

森 岡 敬一郎

私が占部百太郎先生にお会いしたときは、神山さんよりまだ私のほうが若いので全く老人でいらつしやいました。一番思い出があるのは、河北さんたちと旅行に行つて、軽井沢の宿屋で一晩御一緒に泊まった時の思い出です。学問的なことは、私はただ本を読んだのと、あと近山先生から伺つたのです。

いまお話がありましたように、戦後、神山さんまでの間に大体三人教授が出られて、田中先生の次の教授が占部百太郎先生です。この先生は研究が、イギリスの憲政史を研究なさつて、ポラード (Pollard) に習つてこられた。ちょうどロンドン大学に留学中にポラードに習われたのです。昭和の初めに『英国憲政史』(昭和二年)を書かれて、これは評判のいい本だったので。もう一つ『英国会之起原並進展』(大正十三年)という小さな

ほうの本で学位を取られたのです。そのほかのなさつたお仕事では、フランス革命のオーラルを大体粗述されたもの、それから非常に珍しいものでは、昭和八年に『近代国際関係史』という題で、これは外交史なのですけれども、非常に早い時期にそういう名前本を出された。それから後は、政治学の関係のマリオットなどの英国憲政論のようなものを幾つか出されているのです。こゝれはどうも田中先生以来の一つの伝統であつたらしくて、いま田中萃一郎『史学論文集』なるものを見ますと、先生の書かれた論文の中に非常に多いのは、政治思想史関係と、それから歴史ばかりではなくて政治学があります。こういうものを占部先生も間崎先生も継承されたらしくて、私が助手になつたときに一番偉い先生は間崎先生で、この先生も、さつきありました野村先生と同じで

オールド・リベラリストでして、世の中とどうも合わなくなってくるもので、やたらに怒られるので、こわかった。これは加賀美さんなどもご存じだろうと思うけれども、しょっちゅうカミナリをおとされる。そのかわり大変いい方で、怒っても余りこわくないんですね、そのときはびっくりするけれども、大変さっぱりした気性の方です。

先生に言われたのは、その国の歴史をやるなら、ついでにどうしてもそれぞれの国の政治思想を勉強しなければいかん。その国の人が書いている歴史をわれわれは二次的なもので勉強することになるのだけれども、その中で書かれている思想的な枠がわからないから、どうしてもこれをやれと。ずいぶん勇敢だったと思うのですけれども、戦時中であるにかかわらず、私が習ったのはラスキのと同じ系列である多元的国家論。これは後で近山先生に伺うと、慶應が大好きだったという本なのだけれども、マツキーヴァアの『モダン・ステイト』というのを先生が持って来られ、これをぜひ読め。これは大変な本で、当時、下手すれば後ろに手が回ってしまいうような本なのです。これは個人主義の聖典のような本なのです。私はそういうことでイギリス史をやることになりました

た。占部先生は本を拝見するだけで、個人的には存じあげないのですが、間崎先生は本当のいわゆるオールド・リベラリストです。田中萃一郎先生についてのお話も間崎先生から伺うだけなのですが、『田中萃一郎史学論文集』と並んで、大正二年に『欧米の政党政治』というのがあります。これと大正九年に出された『普選運動の病的思想』というのがある。これを図書館で借りてきまして、いまの方ですと非常に反感を持たれる向きもあると思うのですけれども、田中萃一郎先生は、普通選挙法即時施行反対なのです。地方議会から序々に行なえという主張です。吉野作造博士の「民本主義」をかなり厳しく批判しておられる。この批判には今日から見て私などには賛成の所も多い。この論拠は、民主主義というのは知力のある中産層が政府を監視すべきものだ、訓練もない大衆に政権を渡したときは、衆愚政治に陥り下手すれば官僚によって操作されてしまう。そうなったときには、デモクラシーそのものの死滅であるということなのです。間崎先生も根本的には大体そうだったようで、そのためかなり社会主義者などをいろいろおっしゃったので、大分誤解も受けたらしい。こういう系列というものが、やはりオールド・リベリズムというか、あるいは典型

的にイギリス流のリベリズムとか、あるいはブルジョア・リベリズムとか、こういうものの線というのが、少なくとも間崎先生ぐらいまではそのまま伝えられていたということです。

そして、いま神山先生から何うと、福沢も田中萃一郎先生もトックヴィルが非常に好きで、影響を受けられたというのだけれども、間崎先生もトックヴィルは大好きでした。それから近山さんも好きだった。それから、田中萃一郎先生が最も高く買っているのはブライスとバジヨットで、ブライス『神聖ローマ帝国史』が占部先生によって訳されているわけです。ですから、こういう系列のものの中で育ったわれわれの先生たちからわれわれは習ったわけです。間崎先生については、ここにお出でになる方も個人的にご存じの方が非常に多いので、これ以上は触れません。

最後に、初代の中世史を教えられたのは、慶應では占部先生だったのです。占部先生はイギリスの憲政史をやりにながら——アメリカやイギリスの大学へ行きますと、憲政史家というのが大体中世史家を兼ねていて、恐らくそのような傾向の方であったのだと思うのです。

そして、近山先生の年代になって中世文化史の方向に

いったのです。大正期に慶應からたくさん海外に出た方が、ヨーロッパ文化の基礎を知るには近代だけではだめだ、中世を勉強しないとヨーロッパの基礎はわからないというようなことで、それから一時期、そういう影響を受けられた方が、哲学のほうの松本正夫先生とか、それから英文学のほうの厨川先生、それから歴史の近山先生、この三方が大体中世研究をされた。近山さんは主としてキリスト教史を後でなさったのです。占部先生に習われたそうで、占部先生が若いときに、一緒に中世史の教科書を書こうと言われた、だけど、ついに書かなかったということ伺いました。

もう一つの問題は、慶應の西洋史というのは、ドイツ史学に対してかなり背を向けていまして、そして外国の歴史では英語、それからフランス語を非常によくやらせて、慶應フランス学派と言われたことがあったのだそうです。その一つは東洋史の松本信広先生だったのですけれども、『田中萃一郎史学論文集』というのを見ますと、この中に『古代国家の五十年記』という論文があります。『古代国家』を出してから五十年目のクーランジュ論を書いておられるのですが、これはなかなかおもしろい論文なのです。クーランジュがデュルケムへいって、デュ

ルケムの流れが初期のアナール派にいつて、最近のアナールへ来るのですが、克蘭ジュからデュルケムまでの関係があつて、そこには一種の綜合史觀のようなものがあるのを見通されていたらしく、おまえたちはそういうことをやれということが、ここに書いてあるのです。

ですから、田中先生自身はドイツへ留学されたのですが、松本先生などのフランス傾斜が起つたのかも知れません。近山先生から伺うところによると、非常によくフランス語がお読みななれたらしい。それで、ある本を見ると、ちゃんと評が書いてあつたり、あるいは仮名が振つてあると云うのです。それはいま見ても大変正確なフランス語になつている。恐らくどこかでフランス語をうんと勉強されたらしい。

そのあたりから、よくわからないのですけれども、東大のドイツ史学に対抗するという意味で、意識的にフランス史学にいつたのではないかと思ひます。ドイツの同じ史学をやるにしても、たとえば美術史をやつて、ルネサンスを書いたブルクハルトをやる。それから、ルネサンスとドイツ市民社会的な発想で西洋史をやつた近山先生はフランス史学を勉強されて、後のほうではカトリックに入られた。純粹日本のものに対しては、間崎先生

も近山先生も、それぞれ別の意味ではあつたけれども、かなり批判的であつた。

ですから、御二人とも戦時中はずいぶん生きにくかつたのだらうと思つたのです。私達が入つた時期は戦時中の非常に激しい時期と、それから今度は兵隊から帰つてきて、われわれの言うとおりにしておけばこんなひどい戦争はなかつたんだという非常に勝ち誇つた慶應の時代で、この時代は食べる物もなければ、月給もろくにくないだけども、意気だけは非常に上がつていた時期でした。われわれの先輩たちが残してきたものから、これから来られる方がどういふ道を開いていかれるのか、将来の日本の展望ともあわせて、一ついろいろとご検討を願ひたい。これは中井信彦先生などもいつかお話ししたことがあるのですけれども、われわれが持つてきているものの中で生かせるような材料を生かしながら、長所を生かしながら、新しい対応をしていかなければいけない。そのためには、かつてどうであつたか、われわれがどういふ道をたどつてきているのかということも、たまには振り返つてたどつてごらんになりながら、新しい道を進んでいかれることを望んでやまないのです。

最後にもう一つ申しますと、慶應は世俗の学校であり

まして、宗教的でない学校なのですけれども、図書館にお出でになると非常にはつきりわかるのは、ミッションの学校でもちよつと持っていないくらい（上智大学などとは比較になりませんけれども）宗教的なものが非常に多くて、日本史のほうでも特にキリシタン関係のものは古くからやられているし、東洋史でも、民間信仰は盛んに研究されているし、本も多い。それから中世キリスト教思想史関係のコレクションは一つの宝庫なのです。これは、ヨーロッパ文明とか東洋文明とか自分の文明も含めて、底部にある本質のところから考えようとしたことのあらわれではないかとも思うのです。これから将来の研究テーマをお選びになる場合に、いろいろお考えになつていただけると、私はやめた身として非常にありがたいと思います。

私のは取りとめもない話ですけれども、これで終わらせていただきます。

司会 どうもありがとうございます。

これで講師の先生方のお話は全部終わりました。非常に多岐にわたり、豊富な内容のお話を伺ったわけですが、皆さんも同感であられると思うのです。先生方

に何かご質問がありましたら、この際ぜひしていただきたいと思ひます。慶應の先輩である歴史家の群像を思い出して、そしてそれがわれわれにどうつながってくるか、われわれがこういう伝統に対してどう身を処すべきかといったことを考える機会はそうないと思ひますので、この際ぜひ先生方にご質問いただきたいと思ひます。

志水 河北先生、神山先生がお話のなかで触れられた、なぜ田中萃一郎が慶應大学に入ったかという問題は、私どもが著作の上で見えていきますと、どうも那珂通世という人をその中間者として考えるとよいのではないか。たとえば那珂通世の『支那通史』というのが宋時代で終わっています。片方、田中萃一郎先生の『東方近世史』がそれに接続するというような関係があります。ですから二人は親交があつたのだというふうに思われます。それが一つです。もう一つは晩年の作品で、田中先生は『ドーソンの蒙古史』というものを訳されております。一方、那珂通世は『成吉思汗実録』というのを完成している。この二人の間に密接な関係があつたことは考えてよいのではないかと思われるわけです。

司会 どうもありがとうございます。

それでは、まず河北先生のほうからお願いいたします。

河北 いまの問題は、前、斯道文庫におられた太田次男さんなどが少し突きとめようというような試みをしたことがあるらしいのです。まだはつきりとしたお答えを聞いていませんが、もう一つ確かめるところがないのです。

それと、那珂通世という人は、確かに塾は出ているのだけれども、余り三田のほうへはあられなかつた人物らしいのです。だから、その辺でちょっと懸念がある。本を読んで、それから影響を受けるということは多分にあると思うけれども、どこまで親交があつたのか、どういふ話をされたのかというようないふ材料に出てこないものですから……。

志水 ついでに、橋本増吉先生が慶應にやってきて、これも上世紀考という那珂通世さんの著述、その辺に一つの出発点がありまして、いわゆる邪馬台国論というようなものになっていくと思われのです。そうすると、那珂通世という人は高等師範学校の教授であるというようないふことを含めて、表面には出てこないのですが、何か後ろで塾の講義編成についていろいろ相談に乗っていた部分があるのではないかというのが私の考えです。仮説ですから、詳しくは塾の当該史料を中心に検討のほど

をお願いしたい。

河北 高等師範学校と言えば、小幡篤次郎さんなどがいつて高等師範を創立をしていますから、直接間接に、那珂さんと小幡さんの影響が及んだはずですよ。那珂さんは慶應義塾を出ているわけだから、高等師範が育つのに、塾の芽が向こうへ根づいたという考え方はできると思いますが。しかし、逆にその那珂さんがどれだけ慶應へバックアップしてくれたか、その点を史料証明するのははむずかしい。

森岡 おととい江坂輝弥君に会つたのです。江坂君が、那珂通世、それから三宅米吉、それから田中萃一郎の關係を調べられたら調べると盛んに言っていました。だけど江坂君は、私は考古学者だからできないと言つていた。だから、やはり問題はあると思います。ただ、江坂君は可成り調べていられるようです。

司会 どうもありがとうございます。いまのご質問は、神山先生にもありました。

神山 私は太田次男さんから、那珂通世が慶應の史学の一番初めのところでなかなか重要な位置を占めているようだ、自分はいま調べているんだということを知っているだけで、まだその結果を聞いていないのです。僕ら

は直接できないから、太田さんからいつか話を聞けたらいいんじゃないかと思えますね。

森岡 那珂通世をやっている人がいましたね。

三木 村上さん……。

河北 都立大学名誉教授の村上正二さん。

森岡 村上さんに聞いたら、那珂通世のことは非常によくやっていたらっしゃるわけだから、何かわかるかもしれない。

司会 どうもありがとうございました。まだ何かご質問がありましたら……。いま那珂通世、それから田中萃一郎関係でおもしろい示唆をいただきました。きょうはお話が非常に多岐にわたりましたけれども、大変豊かな内容なので、いろいろご質問があると思います。

河北 さつき林さんがおっしゃったことで関連して補足しておきますと、田中萃一郎が哲・史・文の三つをつくるときに、史学科を先につくると言い出して、ほかの科がちよつと待ってくれ、俺達もやるからというので、文学科、哲学科ができています。それは『慶應義塾百年史』のほうではつきりわかるのです。だから、林さんが推測されたように、田中さんが中心になって動いている。

これはよけいな話ですけれども、田中先生というのは慶應義塾を牛耳るぐらいの力を持っていた。これは高橋誠一郎さんの話ですが。ただ、いかにもスタイルが悪い、なぜスタイルが悪いかというと、いつも重い本を抱えて、こうやってかしいで歩いているから、塾長になれなかつたんだと冗談を言うぐらい勉強をされた先生らしい。給料は全部本を買うのにつかっってしまうというのが趣味だという。予科の主任をしておられた。そういう意味で、慶應の文学部をこういうぐあいやっていこうという中心になれるのは当然だろう。確かに三分科ができたときは、史学科のおかげでと言ったら語弊がありますけれども、史学科が先頭に立ったために三分科ができたということは言えるのだろうと思います。

林 リースの關係だけでも、リースがランケの弟子だということで、イコールランケみたいにならずと受け取られているのだけでも、それはどうでしょうか。リースは本国に帰っても冷遇されるんです。それはユダヤ人だから冷遇されたんだということになっているけれども、ランケの弟子ではあるけれども、ランケの主流ではなかった、リースそのものが違ったものをくんでいたのだらうと思うのです。それを受け継いだ幸田成友も、東大

で一番のリースの弟子と言われながら、とくにランケの持っていたマイナスの側面、歴史に進歩なんかない、神意の実現だというようなところ、それから極端なプロシヤ主義的などころとか、そういうのは全然受け継いでいないのです。リースそのものがランケとは違ったものを持つていて、後にランプレヒトなどが出てくるような方向にすでにあつたのではないか。そういうことをちゃんと調べてみてほしいと思います。幸田先生が一生懸命やった、リースが日本でやった講義のテキストは残つていて、慶應の図書館の目録に一つ出ていたから、そういうものをもっといろいろ集めて、実際にやった講義の中身を分析すると、ランケの史料批判の方法などは受け継ぎながらも、そこでさらに進んだ、後の新しい、ランプレヒトなどにいくようなものがあつたのか、なかったかというようなことを確かめられるだろうと思います。誰もまだ、リースの実際の講義の内容を分析していないのです。それをぜひやってみる必要があります。

ランプレヒトはそれに対して、歴史の進歩が問題なんだと、バックルなどに共通のものをドイツでやるわけです。だから、その点で田中さんの方向は首尾一貫しているんじゃないかな。また、ランプレヒトのところは阿部

秀助を送るでしょう。最初からランケのマイナスの側面にとらわれていないで、バックルとかとの結びつき得るような方向で出てきていたのではないでしょうか。それはリースを分析し、ドイツのそのころの史学史を丁寧に分析して、それとの関係で日本で出てきたものを解明する必要があります。

森岡 リースはイギリス史家なんです。それで、中世の選挙法の問題とか、そういうのをやっているの、制度史家みたいなどころがあるんですね。だから、ランケの政治史オンリーみたいなものと、あるいは違うのかもしれない。

林 それから、リースは東大で幸田先生などを指導して、演習をやり、その演習が日本における『日欧通交史』の研究のともになります。史学雑誌に日本史関係の論文をいくつか出しています。ウイリアム・アダムとか平戸商館の歴史とか、ポルトガル人を日本が追放した原因とか、そういう論文を書くわけです。そういう論文を書くために、幸田先生など弟子にゼミでそういう問題を出して、そして史料を集めさせて報告させることをやっていたのです。そこから幸田成友の『日欧通交史』は出てくるわけです。そこで初めて、ちゃんとした原史

料に基づいてやるという、いまだかつてなかったものがそこでも出てくるわけなのです。

それから、ポルトガル人追放とかいうのは一応外交史みたいだけれども、貿易の問題が絡んでいるんだし、それから日本からの金流出などは経済史的問題です。そんなふうなことをあの段階でやっていたのです。それで、彼の著書の“ALLERLEI AUS Japan”の部分訳（原潔・永岡敦訳『ドイツ歴史学者の天皇国家観』新人物往来社一九八八年）が最近出たけれども、それにははぶかれてある「十六・十七・十八世紀日本からの金流出」という論文があります。私が初めて幸田先生の演習についたときに、先生が原本を貸してくれて、それを訳して出せといたので、『文林』という三田の文学部の雑誌の四号に、幸田先生に後で見てもらって、載せました。

ドイツの中世の経済史研究があのころから急に発展してくるでしょう。ドイツの荘園研究が飛躍的に出てくる。リースが日本に来たときには、向こうでは中世経済史研究が飛躍的に発展し始めるときです。だから、それがいち早くリースを通じて日本に伝わってきた可能性があるかもしれない。それはよくよく注意して見ないとわからないよ。こつちのほうにそういうことを察知して受け入

れる条件がすでにはつきりできていれば、すぐそんなことがどこかで出てわかるわけだろうけれども、そういう状況ではなかった。最新のものが日本に入ってきたって、その有難味なんかすぐにわからないわけです。しかし、幸田先生なんかはそういうところに食いついたんじゃないかと思えます。リースを媒介として入ってくるのも、一番進んだ面を、はつきり意識したわけではなかったかもしれないけれども、それを受け継いで、それをもとにして発展させていったというところに意味があると思えます。そういうことをぜひ明らかにする必要があります。

森岡 上原専祿もやっぱりランプレヒトのところでも勉強したんでしょう。

林 上原専祿だけでなく同じ一橋の三浦新七もランプレヒトのところでも学んでいます。幸田先生が三浦新七と何か関係があるかどうか私は知らないけれども、ひよつとすると上原専祿は向こうに行く直前の段階で幸田先生と会っているかもしれない。幸田先生が一橋にいて、日本経済史などをやる、それを聞いていたかもしれないと思うんだ。そのころ上原専祿は一橋の前身の東京高等商業の専攻科を出て、それでドイツに行く。ドイツへ行ったときにはドープレヒトについています。上原さんは

何も知らないから、誰についたらいいかと言ったら、三浦新七が、ドープシユにつけと言ったというんだね。これもさすがだね。三浦新七の学風とドープシユとは違う。ドープシユは幸田式なんだよ。壮大な展望をもっているけれども、しかし、その基礎にはしっかりした史料研究がある。だから、幸田先生も後々まで上原専祿は非常に好きだった。恐らく行く前から上原さんのほうも幸田先生を知ってたんじゃないか。これもいろいろ調べてもらわなければいけないんだけど。

それで、いまでも思い出すんだけど、卒業論文を書いているころ幸田先生から、上原専祿の話がちよつと出たんだ。向こうの古文書の書状、日本だったら切り封とかなんとか、その封じ方をどんなふうにするか、そういうことを実際によく知っているのは、日本では上原専祿ただ一人だと言っていた。本式に中世の文書の研究を——そんなものは原文書を見なければできないんだから——ドープシユの下でそういう仕事をやって来た上原専祿しか知らない。それからドープシユは、有名な歴史文献を演習でやったはず。そうすると、そのテキストをあちこちの図書館から集めてきて、一冊づつ貸してくるっていうんだね。平家物語の〇〇本、〇〇本な

んというのを、学生がドープシユの指示で集めてくる。それを分担して、それぞれの特徴を報告して討論する。そこでその文献のバリエーションは全部集められ、比較検討される。そういう手続の上で議論をする。こういうところで上原専祿は勉強してきた。これで西洋史のほうはガラツと変わるわけだね。

そこが田中萃一郎から幸田成友に到るところにつながっているんじゃないかな。だから、ランプレヒトから学ぶのも、マイナスの面じゃなくて、後に発展していくようなところを田中萃一郎は学んできて取り入れている。世界と日本とのいいものをみんな取り入れて三田の史学ができた、こう考えていいと思うんです。

森岡 林先生、新見吉治というのはどうしてランプレヒトのところへ行くんですか。

林 いや、それは全然知らない。

神山 あの時期は幾人も日本人でランプレヒトのところへ行く人がいたんですか。

林 いたんでしょうね。

神山 田中さんも行ったんですかね。

林 田中さんが一番早いぐらいじゃないの。明治三十年でしようか。新見さんはきつともつと後じゃないかな。

神山 田中さんは明治三十八年からです。一九〇五年。
林 ランプレヒトが盛んにいろいろ本を書くのは十九世紀の終わりでしょうか。

神山 一八七五年からです。リースは日本へ来たとき、若いですからね。たしかドイツへ帰って教授になるんです。

林 いや、教授になれず、講師、のち員外教授でおわっています。

神山 しかし、その後、帝大の坪井九馬三の系統のいわゆる世界史の枠組みというのが中学の教科書になって、われわれはそれを習ったんですが、結局ランケの世界史なんですね、そっくりそのままの構想なのです。ですから、帝大でも箕作元八がフランス史学の系統だったのですが、これはどうも霞んでしまっているというか弱いので、坪井さんがやはりリースの直系だというふうにわれわれは受け取ったわけなのです。ですから、世界史の概説も大体ランケ風の世界史の枠組みで話されたのではないのでしょうか。

林 幸田先生たちが聞いたリースの講義のプリント
“A Short Survey of Universal History, being notes of a course of lectures delivered in the Literature”, College of

the Imperial University of Tokyo. というのが、三田の図書館の目録にのっています。これをくわしく調べると、リースの独自性が明らかにできるはずですよ。

神山 もうちょっと中を見ないとね。

林 坪井氏はリースに習うのでなく、ドイツへ留学して、リースが来るころに帰ってくるのです。

森岡 だから、ランケの右翼的なものは坪井さんが持ってきたのかもしれないですね。

林 幸田先生の思い出に出てくるけれども、坪井九馬三がトライチュケの名をあげたとき、同級生のひとりから「あの有名なベールリン大学のトライチュケ教授を知らないのか」と怒鳴られたという話をちらっと書いています。ランケのプロシヤ主義的、政治主義的な側面を一番よく受けたトライチュケはあまりうけいれられなかったことを示しているのだと思います。ランケとトライチュケの流れのどういふところを坪井氏が一番よくとりいれてきたのか、それはよく調べてみなくてはならないけれども、リースは必ずしもそうではなかったのではないかというような気がします。その後、幸田先生は明治三十四年まで大学院にいて、リースは三五年七月にドイツに帰るのだから、そ

れまでのリースの活動の全体と、そのころ、幸田先生をふくめた弟子たちに及ぼした影響を徹底的に調べていったら、いろいろなことがわかってくるでしょう。

幸田先生は「大阪市史の編纂について」という文章（著作集第七卷所収）で、大阪市史に着手するときに、二、三のドイツとイタリアの市史を参考にしたと言っています。「ほんの垣間みただけ」などと言っているけれども、日本では市史というのはそれまで全然、前例がないものだから、あれだけのものを当時二十八才の幸田成友がつくるというのは、やっぱりよりどころがあつたに違いないと思います。それは何だろうか。ドイツとイタリアの幾つかの市史を幸田さんが見たというのは何なのか調べて、それと大阪市史がどこで共通し、どこが違っているかということ調べてみると、また非常におもしろい問題が出てくると思う。

しかし、これらの市史はまたリースに教えられたのだらうと思います。そんなことを教えられるものは当時ほかにいなかったでしょう。坪井九馬三、箕作元八の二人が幸田先生の大学時代の教師ですが、かれらではなかつたらうと考えます。幸田先生が大阪市史を始めるのは明治三十四年からで、リースがまだいるときです。だから、

リースに一番弟子でかわいがられていたわけだから、リースのところに行くと相談に行く。そうするとリースはそのころヨーロッパで一番よくできている市史はどれかを教えてくれ、そのうち大学の図書館で見られるものを幾つか見たということじゃないかと思えます。そういう指導は、ランケ式の狭い政治史的なものでは出てこない。そういう新しい方向をリースはやっぱり持っていたのではないか。それは私の全くの仮説ですけれども。

神山　そこらの細かいところはちよつとわかりませんが、大体一八七〇年代になると、ドイツでは帝国ができたものですから、本来の歴史学と政治とをくつつけたトライチュケみたいなものは目的が遂げられたわけなので。だから、ドイツの学界ではプロイセントゥムをやめようというんです。それで、もとのランケに帰れ、ランケ・ルネッサンスだと言い出したんです。リースはその中から若手として出てくるんですよ。ですから、あまりトライチュケ風にダットとかしいでいることはないと思えます。もとのランケの堅実な、一種の史料実証主義というものを方法論として取る。その上で、新しい要素をどれだけ入れたかはちよつとわからないですね。

三木　さつき上原専祿さんの名前が出てきたり、それ

から幸田先生が一橋にいかれたり、それでなるほどな
思ったのは、増田四郎さんが昔、私だけでなしに一橋の
史学というのはアマチュア史学なんだと、それを非常に
自覚的、意識的に言っておられるんですね。それは塾と
つながっていると思います。上原さん自身も町人学者と
いうような、意識的にそういうポーズというか、スタイ
ルを取られていました。

それから、経済史ということでお伺いしたいのですが、
竹越三叉の『日本経済史』は幸田先生の『経済史』と何
らかの関連がございますか。

林 大阪市史の仕事をずいぶん使っていると思います。
三木 やはり幸田先生は経済史の道を開かれた、その
流れの面がやはりあるわけですね。

林 つまり大阪市史がなければ、江戸時代の経済史は
全然できなかつたろうと思います。竹越さんの本は日本
経済史だから、古代から全部ありますけれども、その
江戸時代のところ、大名貸だとか貨幣の問題だとかは、
大体みんな大阪市史でやられたことが土台になってでき
たんだと思います。直接関与したかどうかは知らない。
さつきちよつと言ったように、東京市史稿の中心になつ
た木村莊五という人が慶應出なのです。

三木 私などにとって学問の世界は、第二次大戦後に
なってやつと物心がついて、経済史というと農村経済史
という頭があつたのですが、きょうのお話を伺っている
と、都市、商人の歴史はむしろ慶應が中心になって開拓
してきている。それが第二次大戦後になって、農村経済
史が立派になって、最近になって、また都市、商人とい
うのが非常にクローズアップされているところか
ございます。

それと、関連のない質問なのですが、森岡先生、ある
いは神山先生、間崎先生の訳のハンチントンの『気候と
文明』、中学校のときに読んで実におもしろくて、いま
だに記憶しているのですが、たとえ翻訳であつても、非
常に早い時期にああいう分野に目をつけられた。現在た
だいま、生態学的、あるいは社会史的に、ああいうこと
が非常に問題になってきております。間崎先生がああい
うの目をおつけになつた背景はどういうものなので
しょうか。

林 やつぱり田中萃一郎でしょう。

神山 やはり田中さん式の文化史、文明史かな。どう
でしょう。福沢の影響もあるかもしれませんが、歴史と
いうものを見るときに、すぐに文化、文明、あるいは民

衆というところに目がいくところがあったのではないかと思えます。

林 それで、間崎先生は慶應の教師になって、最初は地理を持っていたんだね。

神山 そう、僕らは地理を習ったんです。

林 田中萃一郎とか偉い先生が生きていて、初めて慶應で使ってもらうというときに、新任教師は予科で地理を担当するのが慣例だったようです。その伝統が、ずっと後までのこっていたのでしょう。

神山 僕らは間崎先生に地理を習いましたが、先生はすぐ地図を描かせるんですね、歴史地図を。やっぱり自分で苦労して地図を描くと、歴史が本当に頭に入るんです。ですから、私はいま小さい大学で歴史を教えているのですが、歴史の学問というのは地理と全く一体なのだから、エルベ川といったって、ピレネー山脈といったって、どこにあるのか知らないんじゃないからと、いちいち地図を見させ、場合によっては描かせる。やはり間崎先生の教育だと思います。

林 それで、リースも歴史と地理を教えていたのです。

三木 東大ですか。

林 地理と地文学です。今でいうと人文地理と自然地

理まで担当科目になっています。幸田先生は地文学はさっぱり聞かなかったというふうに書いています。その段階で、歴史を勉強する者は地理をやらなきゃだめだといったのです。それがまた、田中萃一郎を通じて慶應の史学科にも受け継がれ、歴史をやるには地理もしっかり勉強しなきゃだめだということになったのだと思います。

速水 私も実は人口というのを今やっていますけれども、そうすると、どうしても環境とか気候というのが出てきます。地理の人なんかとも関係が出てくるんですね。地理学では間崎先生のハンティントンの例の『文明と気候』のような考え方は、いまの日本では環境決定論ということで、地理学でも歴史学でも、どっちかというところ定されているわけです。だけれども、いまのように環境問題が出てくると、もう一遍あれを見直さなければならぬという動きがまた出てきたんですね。そうしますと、間崎先生は、言ってみれば時代を一つも二つも三つも先取りされていたということが言えなくもないと思います。

われわれはもちろん環境決定論に陥ることは避けなければならぬにしても、無視することはもちろんできないわけで、おっしゃるように、地理と歴史というのは重

なるべきである。これはよそから見ている話ですが、史学科でぜひ地理の教育がもっともとなされてもいいと思つている一人であります。

神山 あの時代はちょうどバツクルやテーヌの環境決定論みたいなものが流行みたいでしたから、あるいは先生もそういうものに乗つてその問題を取り上げたのかもしれないのですが、今になると公害なんかで急に気が付いてエコロジーカーなんかを入れて、歴史を自然環境から見直すというようなことがしきりに出てきていますから、慶應でも地理学を盛んにしてほしいと思います。しかし、昔と違つていまは研究が大組織になり、機械化して、慶應のようにお金がなければとてもまともな地理学の研究はできない状態だと思うのです。都立大とかのような大きい組織を持つているところと協力してやつていけたらいいと思つております。

林 幸田先生が大学を出てから大阪にいくまでの間、いろいろな本を書いています。卒業の翌年には東洋史の中学教科書、三二年には喜田貞吉と共編で外国地理の教科書、三三年には、先生ひとりで「外国中地理」という教科書を出しています。大学を出たばかりの幸田成友が東洋史や外国地理の教科書を書いているとは、誰も想像

しないでしょう。日本史の教科書はずつと後の大正十一年からで、ほくらは中学でこの教科書を使いました。

それらより前に明治二十九年にイギリスのロバート・マッケンジーという人の『十九世紀史』というのを幸田先生は訳しています。

森岡 マッケンジーってありますね、イギリスの。

林 幸田先生は、金がないから、長兄の露伴に知恵をつけられて、その当時の最大のジャーナリズムの博文館から出世したら返すという約束で学費を出してもらつたことになり、毎月受取りにいったところ、三年生になつたばかりのとき、博文館から何か翻訳を出してそれで帳消にしたらということになり、ファイフの本かマッケンジーの本かどちらかを選べといわれて、分量の少ない方のマッケンジーをとつたのだといっています。

森岡 十九世紀ですね、やっぱり。

林 そうです。ファイフの本は『近代ヨーロッパ史 一七九二—一八七八年』というので、やはり一九世紀史でした。マッケンジーの訳本は、幸田先生が卒業する直前の明治二十九年二月に刊行されています。この本は、一九世紀史を欧州における自由と自治の一貫した進歩の歴史ととらえ、そのなかにチャーチズムを位置づけたもの

で、おそらく日本では最初のものでしょう。免状主義と訳しているところにも、それが現われているように思えます。後になって、「今になると、なぜその時ファイフをとらなかつたかと名残惜しく思ふ」ということを書いていますが、さいわいファイフとマッケンジの本は、三田の図書館にあるようですから、それらを検討すれば、両者がどう違うのか、幸田先生がファイフのをやっておけばよかつたと言わせたのは何かとか、それから、マッケンジを訳して学んだことが、どう幸田先生の仕事に生きているか、というようなことも明らかにすることができます。

森岡 幸田先生は一橋大学に移ってから西洋史を教えでいらしたそうですね。私と兵隊で一緒だった男が一橋出で、幸田先生からフランス革命を習ったという。それは、カーライルのフランス革命だったらしい。それは、どこでガラスが何枚割れたとか、そういう非常に詳しい話で……。だから、西洋史をなさったのでしよう。

林 そういうことができたはずですよ。

神山 みんなやらなきゃしょうがないからね。

司会 お話が弾み、いろいろ有益なことをたくさんお聞きかせさせていただいてありがとうございます。

もつとこのお話を続けられたらいいと思うのですが、予定の時間が迫ってきましたし、またこの後の予定もありませんので終りに会長からご挨拶をいただきたいと思えます。

三木 先生方、どうもありがとうございました。おかげさまで大変いい会になりました。伺っていました、初めに申したことです。私達が準備の過程で感じました、いわば塾的で自由闊達で、東西にいろいろなネットワークを持って、同時に近代日本史学史の中でもしっかりと位置を占めている姿が、雰囲気とともにずいぶん浮かび上がってきたと思います。取りわけ河北先生がご指摘になった日・東・西を田中さんは分けなかつた、また林さんが強調された、田中さんは恐らく在野の史学科をつくるという意気込みでやられたのではないか、そういうことがいろいろエピソードや事実とともに浮かび上がりました。

それと、いま一つ感じたのですが、きょうお話に出ました先生方はどういう業績があるかというようなケチなものではなくて、むしろそれぞれに新しいジャンルを開かれた。幸田先生の『経済史』や『日欧通交史』あるいは間崎先生の時代をはるかに先取りして『気候と文明』

などというものに目をおつけになるとか。そもそも福沢からして、社会史、文明史、あるいは文明論などといって、いま問題になっているようなことを、明治の早くから問題にしておるわけです。そういった意味で、三田史学というのは、ある意味で時代を先取りして、当時の人々には未知の分野にもいち早く鋏を入れていった、そういう大変いい伝統をわれわれは背負っている。

現在ただいま、世界的にいままでのパラダイムが崩れてしまつて、歴史をやる人間はみんな新しいパラダイムを模索していると思うのですが、そういう時に当たつて、こういう過去の、ある意味ではご自身でパラダイムをつくりだされたような先生方のお話を聞かせていただいたのは、本当に時宜を得たものだったと思います。

本日はお集まりの皆様、どうもありがとうございます。た。

—— 閉会 ——